
紅子様の呪い

あさぎ 翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅子様の呪い

【Nコード】

N25420

【作者名】

あさぎ 翠

【あらすじ】

「ならば、私の下部になると仰いなさい。そうすれば、元の姿に戻してあげるわ」という作者の思い付きから始まった基本ギャグのお話。ラブ要素は絶対ありません。

※全編でキッドが女の子になっています。苦手な方はご遠慮ください。

01落ちてきた怪盗

7月も終わりに近付いたある日の夜、コナンはビルの屋上でキッドを待っていた。キッドを待って何をするのかと言えば、世間話や最近読んだ本の話、学校での事、いわば雑談だ。別に親しくなったとかではない。隙あらば捕まえようと思うし、実際に何度も捕まえようとしたが絶対に捕まらなかった。それに自分ひとりでは捕まえられないという事も知っている。ならば何の為に来ているのか。強いて言えば暗号の答え合わせ、それが一番しっくりくる。

21時を回り、円みに欠けた月が全貌を現した。犯行予告時刻は20時半だったから早ければそろそろ来る頃だ。

コナンはキッドが現れるはずの空を眺めていると、キッドと思われる影が見えてきた。そしてそれはどんどん大きくなり、ハングライダーの羽が畳まれ、飛んでいた勢いのまま落ちてきた。頭を抱え体を丸めた状態で背中から落ち、1、2度弾んで滑るように転がる。そしてフェンスに当たって停止すると、小さく呻き声を上げてそのまま動かなくなった。

「キッド！」

コナンはあまりの出来事に思わず呆然と眺めてしまったが、キッドの呻き声を聞くと慌てて駆け寄った。

「おい、キッド！大丈夫かっ！おい！」

キッドがハングライダーを操作しきれず落下だと？！ぱつと見、血が流れている様子は無い。念のため髪の中も確認したが頭部にも外傷は無い。シルクハットは落下の衝撃で外れて転がっている。身体の方も出血を伴うような外傷はない様子だが、どこことなく違和感

を感じた。

「キッド！どうした！何があった！」

今度は肩を揺すりながら呼びかける。するとやっと声が届いたのかキッドは薄く目を開き、コナンの姿を認めるとムクリと起き上がった。

「あれ、名探偵？俺、何してたんだっけ？」

おいおいおい、それを聞きたいのはこっちの方だ。コナンはすっかりボケているキッドの様子に溜息をついて肩を落とした。

「とりあえず怪我は無いか？頭は？」

「怪我？そういえばあちこち痛いけどなんで？っていうか俺、声、変じゃねえ？」

言われてみれば確かに声が妙に高い気がする。まるで女みたいな、
・・・女！

「キッド、お前ちょっと立って見ろ」

キッドは素直に立ち上がりうとして驚いた。まず床に着いた手で袖口を踏む。立ち上がろうと体を傾げた際にジャケットが重力に従って移動する。そして立ち上がってみればスラックスがズルズルと下がり、うわあ、と慌てて押さえ込んだが何とか腰骨に引っかかって止まったようだった。実際キッドは落ちそうになるスラックスを押さえる事が出来なかった。なにせ袖からは指先しか出てないし、ジャケットのボタンはウエストより低い位置にあったのだから。

「なんで服がデカく・・・」

コナンは真剣な顔つきでキッドを観察していた。身長は蘭より低い。もしかすると同世代女子の平均身長よりも更に低いかもしれない。体型は服に隠れていて良く分からないが、首の細さからみても痩せ型だろう。

コナンの視線がなんだかいたたまれなかったが、そんな事を気にしている余裕もない。キッドは邪魔な袖口を捲り、スラックスを直そうと引き上げて違和感に気付いた。まさか……。自分の顔から血の気が引いていくのを感じながらコナンを見た。

「名探偵、ちょっと後ろ向いててくれるか」

そういいながら自分も後ろを向きスラックスの中を確認する。

そこには、あるべき筈のものがなかった。

キッドはギュッとベルトを締めると、ガクリと膝を突く。

その様子をこっそり見ていたコナンはキッドの正面に回りこみ、何の感情もなく「触るぞ」と言って右手を伸ばした。その手に伝わるのは特有の柔らかさと膨らみ。コナンはキッドの目を見ると、触れていた手をそのまま上げて、じゃあな、と言いながら歩き出した。

「どこ行くんだよ」

「帰る」

「逃すか!」

キッドは膝立ちのまま体を捻ってコナンにタツクルした。なんて薄情なヤツだ。トモダチがこんな状況に陥っているというのに。

「うるせー!これ以上非日常的な事態に構ってられっか!」

「話ぐらい聞いてけよ」

「話ってこの事態の説明が出来るってのか？」

「事態の説明っていうか、こんな事出切るのは一人しか知らないって言うか」

「犯人が分かっているなら俺の出る幕は無い。帰る」

「帰してたまるか！」

コナンは足にしがみついたキッドから逃れようとがくが、キッドの方もそうはさせまいと必死にしがみ付く。

「何の用だよ。オメーをこんなにしたヤツはオメーの知り合い。俺が口を挟む余地はねえ！」

「いやいやいや。ここに居合わせたのも何かの縁。協力してもらうぜ、名探偵」

キッドはニヤリと人が悪い笑みを浮かべる。どうあっても放してくれるつもりは無いらしい。

「協力ねえ……。仕方ねえから話だけ聞いてやる」

「よし、そうこなくっちゃ」

キッドは起き上がって長すぎる袖とスラックスの裾を手早く折ると胡坐をかいた。そして自分の目の前の床を叩きコナンへそこへ座れと指示する。コナンも話を聞くと行ってしまった以上ここで逃げ出す訳にもいかず、ブスツとした顔で渋々と仕方なく嫌々胡坐をかいた。

「で？」

「なあ、魔女って信じるか？」

「はあ？ 魔女？ 東都五輪の女子バレーボール日本代表チームのことか？ それとも中世の時代に行われた魔女狩りの対象の事か？」

「いや、どちらかっていうとオカルト的かつ宗教的で、ファンタジックなヤツだ」

「断る」

コナンは即立ち上がろうとしたが、キッドが透かさず腕を捕らえる。

「話ぐらい聞いてくれるって言ったじゃないか」

「だから俺だって言ってるだろ。これ以上非日常的な事態はお断りだって。そういう事は自分の分だけで手一杯だっつーの」

「冷たい事言うなよ」

「俺は自分の事は自分で解決する。だからオメーも自分で何とかしろ！」

「そうか。そういう事、言うんだな」

キッドはスクツと立ち上がり、ハングライダーを装着した。ジャケットとハングライダーのベルトの緩みが多少気になるが、まあ、何とかなるだろう。それからコナンを睨みつける。怒らせてしまった様子のキッドに、コナンは身動きが取れなくなってしまった。そしてキッドは徐にコナンを抱き上げると、近くのフェンスへ駆け上がり中空へと飛び出した。

「名探偵、前に飛んだ時より揺れてんの分かるか？色々サイズが合っていないから、暴れんなよ。落ちるぞ？」

「ふざんけんなあー！」

見た事のある風景が見えてきた時だった。

「名探偵っ、・・・実は」

苦しそうなキッドの声がする。

「腕が、もたねえ。・・・腕力、落ちてる・・・みてえだ」

「そう言う事はもっと早く言え！」

と言ってみたものの、背後から抱きかかえられているコナンにはどうする事もできない。焦っているうちに良く知っている屋根が見えてきた。

「不時着するから動くなよ」

「なに！？」

キッドは阿笠邸の屋上に足を着いた瞬間、翼をたたみコナンを庇うように身を振って背中から倒れこんだ。落し切れなかった勢いで屋上のドアの横まで床を滑る。

「イテテテッ。今日は落ちてばっか・・・大丈夫か、名探偵」

キッドはコナンを降ろして起き上がると、強く打ち付けたらしい肩や疲労した腕をさすっていた。

「バーロツ、それはこっちのセリフだ！俺はいいからさっさと行け！」

「何言っただよ。これからが本番だぜ？」

キッドの言葉が終わると同時にドアが開いた。阿笠博士が出てきて後ろから哀が隠れるように辺りを伺っている。きよろきよろと辺りを見回していた博士だが、コナンと目が合うと目を丸くして驚いた。

「新一じゃないか！どうした？今の音は何なんじゃ」

「博士ちよっと待って。江戸川君いったい何事？そちらの女性は誰なの？」

「え？あつ、テメツ、何時の間に！」

キッドはいつの間にか白い衣装から黒っぽい服装へと変化していた。Gパン・Tシャツ・ベスト、どこにでも居そうな新一と同世代の男の姿。しかし服が相当ダボついており、哀の言う通り女性だという事が一目で分かる。

「江戸川麻子です。コナンの従姉弟で海外から遊びに来てます。という設定でよろしく願います」

「ちよっ、待てっ！」

「江戸川君、一体どういうことかしら」

何言ってくれてんだ、キッド！ああ、灰原の背後にツンドラが見える。あのヤロ、本番ってこういうことか！

「ふざけんのも大概にしろ、キッド。どういうつもりだ」

「ああ、キッドの変装じゃったのか。それで哀君の声を真似ているんじゃない」

「いえ、そういう訳でも無いんですが……。実は名探偵が私の話を全然聞いてくれないので、聞いてもらえる環境を作ろうかと思ひまして」

キッドは笑顔で言い訳をする。それに対して哀は冷ややかに対応した。

「それって一般的には周囲を巻き込むって言うのよ。それで？私の思い違いじゃなければ怪盗キッドは男性だったはずなんだけど？」

「そうです。その事について協力してもらおうと思っていたんですが、一向に話を聞いてもらえなくて」

「当たり前だ！お前の非常識にまで俺を巻き込むな！」

キッドは寂しそうな視線をコナンに送った。芝居だ、芝居！そんな手に乗るか！しかしコナンの心の叫びを知らない博士はキッドを可哀想に思い、人の良さそうな笑みを浮かべて家の中に招いた。

「そうね、外で話せる内容でもないようだし」

哀もそれに同意する。

「待てよ、そんなのコイツの思うツボだぞ」

「だって、ここで押し問答しても埒が明かないじゃない」

あなたの所為よ、工藤君。哀の冷たい視線がコナンに突き刺さった。

01落ちてきた怪盗（後書き）

お久しぶりです。

新たに連載を始めてみました。

略して紅呪。

最後まで書けるかどうか不安なのですが、頑張りますので応援よろしくお願いします！

101011

02 紅い月

「じゃあ、あなたの話を聞かせてもらおうかしら」

哀は全員分のコーヒーを配り終わるとお盆をテーブルの脇に立てかけ、キッドの向かい側のソファに座った。哀の隣には阿笠博士、左側の一人掛けにはコナンが座っている。哀はカップを持ち、コーヒーの香りを確かめ口に含んだ。

「その前に、どんな話でも最後まで聞いてくれるって約束してくれますか？」

「いいわよ」

哀自身、組織の命令で開発していた薬が低確率とはいえ人間を幼児化させてしまい、自らもその薬で幼児化している実例なのだ。少々の事では驚かない自信があった。

「まず大前提として、私の知り合いに自称魔女がいるんですが・・・」

哀の目が半眼になる。前言撤回だ。

「ほらな、初っ端から荒唐無稽だろ。だからやめろって」

「工藤君は黙って」

「だってよお」

「いいから黙りなさい。どうぞ、続けて」

哀はコナンを黙らせると、キッドに先を促した。

「それが、私がバレンタインのチョコを受け取らなかった事を皮切りに、呪うわ、祟るわ、殺しに来るわ、ちょっと厄介だったんですよ」

「過去形なの？」

「そうです。最近では邪神ルシュファアの予言だとか言ってお節介を焼いてくれてたんですが、今回のコレは・・・また宗旨替えしたのかな？」

キッドは最近の事をいろいろ思い出してみたが、まるで思い当たる節がない。

「それで、いつからそんな姿に？」

「犯行後、逃走中に」

「そういやあ、お前、落ちてきたっていうか滑り込んで来たよな」

そう、キッドは体が跳ねる程の勢いで滑り込んできた。あれで擦り傷以外の怪我は無いのだから、たいした運動神経である。

「ああ、急に眩暈に襲われて、中継地点のビルが目の前だったから飛び込んだんだけど」

「じゃあ、その眩暈はあなたが変化したときに起きたものだとすると、その前に何かきっかけになるような事は無かったのかしら？例えばクスリを投与されたとか、私物を盗まれたとか、呪いの儀式に参加したとか」

キッドは記憶を探ってみるが最近物が無くなったという事はなかった。最初と最後については、そんな事があれば誰でも忘れる事はないだろう。大体そんなことしそうな紅子とは、学校が夏休みに入ったのでそうそう会う機会もない。

『黒羽君、今夜の月はとても美しいわよ』

キッドの頭の中に紅子のセリフが聞こえる。これはいつ聞いたものなのか、と考えてみると、最近どころか今日の昼に紅子に会った事を思い出した。

「そう言えば今日その魔女に『今夜の月は美しい』って言われて、目の端に月が見えたから、ちゃんと見ようとして……」

『紅い月』

またしても紅子の声がキッドの頭の中に響いた。と同時に世界が回転する。またか、とキッドは肘掛けに寄りかかって体を支え、左手で額を支えるが、それでも体が揺れている気がしていた。実際に揺れていたのかもしれない。

「おい、キッド！」

「ゴメン。大丈夫。またちょっと眩暈がしてきただけだから。思い出したよ。あの時見た月が異様に紅くて脳裏に焼きついたんだ。そして気が付けばこの姿」

「でも、おかしいだろ。赤い月ってのは夕日や朝日と同じで、大気中の塵や埃が紫外線を遮ったために波長の長い赤外線が優勢となっで見える現象であって、お前の言う魔法だか魔術だかとは関係ないはずだ」

「ああ、そのことだけど、もしかしたら発動条件じゃないかと思う」「発動条件？」

「確実に俺が月を見るようにあらかじめ印象付けておく。まあ、名探偵も知っての通り、そんな事なくても俺は月を見ることにはなっていたんだけどな。そして俺には魔女によって暗示なり魔法なりが掛けられていたんだ。俺が見る月は紅く見えるように」

そこでキッドはソファの肘掛けを両手でぎゅっと掴んだ。治まりかけた眩暈がまた強くなる。このままでは一人で体を支えられなく

なりそうだ。

「なんで紅くなきゃならねーんだ」

「それは・・・、魔女に聞いてみねえとわかんねえ。悪いけど、もう『紅い月』の話はやめてくれるか？眩暈が、どんどん酷くなっ・・・」

キッドは喉元を押さえ唾を飲み込んだ。実は『紅い月』を思い出す度に視界がグルグルと回って気持ちが悪くなってきたのだ。

（紅子のヤツ、許さねえ。何だって俺がこんな目に・・・）

「どうしたの？吐きそう？」

「・・・・・・だ、大丈夫。根性で何とかします」

「でも、本当にその話はしない方が良さそうよ」

「そうだな」

「なんで？あ」

キッドは顔を上げた瞬間に、なぜ今まで気が付かなかったのかと思うほどの髪が視界に入った。恐る恐る頭に手をやり髪の毛を掴む。そのまま指を滑らせて長さを確認すると、どうやら腰辺りまでありそうだった。前も横も後ろも。

「凄く伸びたわね。『麻子さん』」

「ああ、俺の髪がお菊人形のように・・・」

「オカルティックね」

哀は他人事のように言い放ち、冷めてきたコーヒーを飲む。コナも先程までの抵抗が嘘のように、哀れみの目でキッドを見つめていた。

「ところで『江戸川』を名乗ったと言う事は、博士の遠縁として暫らくここに居たいということなのかしら？」

「ええ、少しの間だけでも。流石にこの格好じゃ家には帰れませんし、幸いここには理解してくれる人と、親戚と思えるほど顔が似た人がいますから」

「ですって。どうする？博士」

「うむ。どうするかろう」

博士は腕を組んで考えているがキッドの事をそれ程迷惑に思っているようには見えなかった。それよりも哀の事を慮っているようだ。博士自身は新一や蘭と同世代の子どもが困っているのだから、助けてあげたいと思っているのだろう。もしかすると彼、いや彼女が世間を賑せる怪盗キッドであると言う事を忘れているかもしれない。

「お前、家って・・・近所付き合いかあんのかよ」

「あのなあ。俺にだって日常ってもんがあるんだよ。親だって居るし、学校だって友達だっているんだ」

「ほお。やっぱりお前、学生か」

「あのなあ、俺今素顔よ？この顔で社会人な訳ねえだろ」

「なんだよ。つまんねえヤツだな」

「残念だったな、揚げ足が取れなくて」

哀は博士と話し合いながら二人の様子を見て思わず溜息が出た。友達？兄弟喧嘩？とてもじゃないが敵対しているとは思えない。こんな調子で『麻子』としてやっていけるのかとも思ったが、怪盗キッドにそれは要らぬ心配なのだろう。

「条件があるわ」

哀は二人に聞こえるように少し声を張り上げた。

「1、怪盗としての仕事をしない。2、家事手伝いをする。3、子ども達が来たら相手をする。他はあなたの自由でいいわ」

「え？それだけ？」

「だって江戸川君の従姉弟としてこの家に遊びに来ている設定なんでしょう？それ以上は不自然よ」

キッドはそれもそうかと頷き哀の条件を快諾する。

「それであの・・・」

「何？」

「哀ちゃんって呼んでいいですか？」

キッドは哀にお伺いを立てるかの様に聞いた。こうして小一時間ほど面と向かって話をしている間に、何となくあまり逆らってはいけないような気がしていたのだ。

「仕方が無いから許すわ」

哀の返答にキッドは胸を撫で下ろす。

「どころで、なんで『麻子』なんじゃ」

「ああ、それは・・・」

「アーサー・コナン・ドイル、だろ」

「その通り」

「安易だな」

「『コナン』よりはマシだと思うけど？」

再び睨み合う二人に、博士は微笑みながらとんでもない事を言い出した。

「それじゃあ部屋に案内しようかのう。麻子君は新一と一緒に部屋でいいじゃろ」

「ちよつと待てよ博士。コイツ一応女の格好してるんだぜ？」

「いいじゃない、仲が良さそうなんだし。部屋の支度をする手間も省けるわ。そうそう、工藤君も麻子さんが出て行くまではここに泊まって頂戴ね。外国から従姉弟が来ているのに放っておくなんておかしいでしょ？」

この家において、灰原哀の発言は絶対である。コナンもキッドも反論する余地を与えてはもらえなかった。

03 紅い魔女

翌日、快斗は朝早くから出かけて行った。まずは衣類の調達をするため変装用の衣裳部屋へ向かう。そこには実際に使用した物からいつか使用するかもしれないものまで多岐にわたる衣類が保管されている。しかしそれらは男性である快斗が使用するもので、魔女によって女性にされてしまった今となっては大きすぎて着られるものが殆ど無かった。

昨夜、あまりの視界の違いに落ち着かなくなり部屋で身長を測ってみれば、なんと152センチしかなかった。快斗は個人的に小さいめの女の子は可愛いと思うが、別に自分になりたかったわけではない。

20センチ以上小さくなった身長に「どんだけ小せえんだよ、俺・・」と呟けば、側で見ていたコナンが腹を抱えて笑い転げた。快斗はコナンを睨みつけ頭を小突く。笑いすぎだ。

とりあえず今は着られるものを探して着なければならぬ。快斗は下着が入っている引き出しの中を覗いて溜息をつく。まさか、コレを本当の意味で必要とする日が来ようとは・・。とはいえ、コレは非常に大事だ。快斗の胸は少々残念なサイズではあったが、男という生き物はしているのかいないのか動きでわかってしまう者なのである。何故ならば自分とその周りの男連中は皆そうだから。

快斗は意を決して早々に身支度を整えると、この迷惑の元凶であると思われる紅子の家へと向かった。

その家は東都の中にあるとは思えないような鬱蒼とした林の奥にある。昼間でも薄暗く不気味なその林は、実は次元の門の先に存在し、その先にある家も本当は東都には無いと言われれば、素直に信じてしまいそうだった。その家に住む者が自称魔女だというのだから尚更である。

快斗は漸く辿り着いた古い洋館の前に立つと、呼び鈴を鳴らそうとして固まった。

（今時ノッカーしかない家なんて、逆に新鮮と言うか・・・。）

そんな事を考えつつノッカーに手を伸ばしたとき、突然扉が内側に開いた。そして目の前に極端に背の曲がった男が立っており、快斗を驚かせる。

「いらっしやいませ。紅子様がお待ちです」

男はそう言うと言の奥へと歩き出した。快斗も恐る恐る足を踏み出す。三步進んだところでギィィ、ボタンと音がし、快斗は驚いた。なんてお約束な現象なんだ。

いやいやいや、と快斗は気持ちを切り替える。こんな所で気圧されてはいけない。自分は文句を言いに来たのだ。決してお化け屋敷の様な魔女の家を堪能しに来たのではない。

男は玄関から程近い部屋の前に快斗を案内すると、ノックして扉を開いた。中は玄関ホールの薄暗さが嘘のように光に溢れていた。天井に届きそうな大きな窓が何枚もあり、部屋の角には観葉植物、応接セットのテーブルの上には花瓶に花まで生けられている。快斗はもっと怪しげな肖像画や動物の剥製なんか飾られたおどろおどろしい部屋を想像していたがどうやら違ったらしい。紅子は応接セットの一人掛けのソファに座っていた。

「まあ、黒羽君！とても可愛らしくてよ」

紅子は立ち上がって快斗を歓迎した。そして自分の正面に座るように快斗を促すと、戸口で畏まっている男に「お茶を」と告げ優雅に着席する。

出鼻を挫かれた快斗はどかりとソファに腰掛け、身を乗り出していきなり本題に入った。

「紅子、なんのつもりだ！俺が一体何をした？何で俺がこんな目に合わなくちゃなんないんだよ」

この迷惑の元凶はやはり紅子だ。最初のセリフがそれを示している。

「昨夜のうちに怒鳴り込んで来るかと思っていたのに遅かったよね」

「こっちにも都合ってモンがあんだよ」

快斗は紅子を睨みつけるが、紅子はそ知らぬ顔だ。

「そうね。強いて言えば、あなたがどうにもならないからよ」

「はあ？何だよ、それ」

「私があんなにいろいろ手間を掛けているというのに、あなたはいつまでもあなたのまま」

「言ってる意味がイマイチわかんねーんだけど。要するに逆恨みじやねーの？」

「違いわ。憂さ晴らしよ」

このとき部屋のドアが叩かれ先程の男が入ってきた。それと同時に高級そうなダージリンの香りが漂ってくる。

快斗は第三者の進入によって畳み掛ける気を殺がれてしまった。まず一度落ち着こうと深呼吸をすると、配られた紅茶の香りが鼻に

付いた。香りが強すぎて日本人向けではないな、と思う。

「だから俺がお前に何をしたってんだよ」

「さっきも言ったけど、何もしてないわ。何度も同じ事を言わせないで頂戴」

快斗は我慢も限界と言うようにイライラと頭を掻き毟った。そしていつもの短髪では無い事を思い出し、絡んだ髪に更にイライラを募らせる。

「あー、もう！埒が明かねえ。いいから元の姿に戻せ！！」

「そんなに元に戻りたいの？」

「あたりめーだ！」

紅子はふふふっとしたり顔で笑うと、ここぞとばかりに言い放った。

「じゃあ、私の下部になると仰いなさい。そうすれば、元の姿に戻してあげるわ」

考え込む快斗の姿に紅子は勝利を予感したが、快斗はまさかの反応を返す。

「なあ？それってどういう意味だ？」

「言葉通りの意味よっ！」

「雇われて雑用をする召使ってことか？」

「なんなのよっ、その国語辞典みたいな解釈は！馬鹿にしているの！？」

「それ以外に何があるってんだよ！」

呆れ返って物も言えないとはこの事か。紅子はあまりと言えばあまりな言葉に二の句が継げなくなった。この男、IQは人並み外れているというのに感情面はどう育ったのか。人の機微も伺えなくてどうして怪盗などやってられるのか。それとも天然なのか。まさか、それほどまでに紅魔女の影響を受けないという事なのか。

「もういいわ。時間はまだあるもの。いい？黒羽君。次の New Moon、つまり新月の日の日没が期限よ。日が沈めば新しい姿で生きていく事になるわ」

「なっ！」

「それまでにゆっくり考える事ね」

紅子は手元の呼び鈴を鳴らし仕えている男を呼ぶと「お客様がお帰りよ」と言っただけで快斗に背を向けた。

「おい、ちょっと待て！新しい姿って・・・」

快斗の声に紅子は振り返るが、鋭い目を向けただけで何も答えない。快斗は男に背を押されるまま魔女の家から出ざるをえなかった。

「ちきしょー、なんなんだよ紅子のヤツ。何か怒らせるような事言っただけか？」

快斗は紅子の家を追い出された後駅ビルへ行き不機嫌丸出しで買い物をしていた。当面の着替えその他もろもろを買い揃えなければ

ならない。洋服は動きやすさを考えてパンツメインで、靴は驚きのシンデレラサイズ、化粧品やらなにやらの小道具類は全部揃っているのでは……。

「俺だってちよつとは怒ってるんだからな！ 訳の分からないこと言いやがって」

そもそもこんな姿にされる意味がわかんねえ。快斗はブラジャーを握り締め架空の紅子を睨みつけた。

「あ、あのー。お客様、ご試着ですか？」

「あ、いえ、これと……これください」

快斗は握り締めたていたものと近場にあったブラジャーを店員に突きつけた。

「はい、合計で一万二千円になります」

予想外の出費に頭を抱えなくなったが、マイナス思考は得意ではない。プラスに考えよう、プラスに。男が女になるなんて、やろうと思って簡単に出来る事じゃない。しかも身長体重に体力や筋力まで女性並みになるというオプション付だ。流石の怪盗キット様でもできない。さて午後の予定は、まず阿笠博士の家に荷物を置き、名探偵を捕まえてから毛利探偵事務所に挨拶に行く。

快斗は買った物をスーツケースに詰め込みながらニヤニヤと笑っていた。

03 紅い魔女（後書き）

明けました。おめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

年が明け「未完のまま約2ヶ月以上の間、更新されていません」の文字を発見し、
流石に「忙しかったのエヘッ」じゃ済まないなあと思う今日この頃です。

このお話をお気に入りに登録してくださっている皆様、
大変お待たせしてしまい申し訳ありません。

次こそは早めに・・・とは絶対に言えませんが、

上記の表示が出ないように頑張りたいと思います。

110109

04 怪盗の休日

信じらんねえ……。コナンは着替えの詰まったりリュックを背負い、空を仰いだ。

江戸川麻子こと怪盗キッドが大きなスーツケースを持って阿笠邸へ戻ってきたのは、今から一時間ほど前の事だった。「お世話になりまーす！」と元気に家に入ったかと思うとコナンの手を掴み、「さあ、行こっか」と笑顔で引っ張り出された。どこに行くのかと思えば、コナンの現在の住居である毛利探偵事務所。今日は蘭の部活が午前中だけだと言っていたから蘭も小五郎も家にいるはずである。キッドは途惑うことなく探偵事務所のドアを叩き、蘭と小五郎に自己紹介を始めた。最初の設定通り、コナンの従姉弟でアメリカ在住、17歳だが飛び級で大学に通っており今回は長期休暇を利用してコナンに会いに来た。なので暫らくの間コナンと一緒に阿笠邸で過ごしたい、いうものである。もっともな理由だ。海外からやって来た親族と一緒に過ごしたいと申し出られて断る理由など無い。ダメ押しとばかりに「僕も一緒にいたいなあ。いいでしょ？おじさん、蘭姉ちゃん」と言えば、小五郎は「好きにしろ」と言い、蘭は「お泊りの用意しなくっちゃね」と着替えを準備してくれた。そしてキッドと手を繋ぎ「それじゃ、行ってきまーす」と手を振れば「行ってらっしゃい。何かあったら連絡するのよ」と何の疑いも無く送り出される。完璧だ。キッドにしてみれば予定通りに事が運んだだけかもしれないが自分の時は……。行き当たりばったりだったな、とコナンは思い、キッドの計画性に身震いした。

「どうしたの？コナン」

「なあ、いつまで手繋いでるつもりだよ」

「えー、嫌なお？」

「うぜえよ、ダラダラ喋んな」

そう言ってコナンは手を振りほどいて帽子を被りなおすと、すたすたと歩き出した。

「もう、乱暴なんだから」と麻子が文句を言うが取り合う気はない。というより、言動に一々腹が立つのは正体が男だと分かっているからだろうか。それともキッドの策にまんまと乗せられてしまっているからだろうか。多分両方だ。そもそも昨夜うっかり哀れんでしまったのが原因なのだが、あれは男として同情の余地はある。ただそこから先が問題だ。別に『江戸川』を名乗る必要はないのではないかと思う。博士の遠縁でも灰原の遠縁でもいいから、改名させればよかったのだ。とにかく自分が巻き込まれさえしなければ・・・。そこまで考えて、ふと、哀の顔が浮かび背中に冷たいものが流れた。彼女は言うだろう「何故あなたが拾ってきたものの面倒を私たちが見なければならぬのか」と。きつとその視線で氷の矢を射ち込んでくるに違いない。そうなるとやはり自分は巻き込まれる運命だったのだ。昨夜キッドの現場へなど行くのではなかった。

「ねえ、コナン。・・・コナンってば」

振り返ると麻子が分かれ道で立ち止まっていた。

「なんだよ。置いてくぞ？」

コナンは再び歩き出そうとしたが、麻子に手を取られ逆方向に引っ張られる。

「米花公園に行こう！この後特に予定無いし、一度家に入ったら出るの面倒でしょ？それに確認したいこともあるし」

麻子は笑顔でコナンを引っ張っていく。彼女の中では既に決定事

項のようだ。

「そんなもん一人で行って来い！俺はこんな大荷物で行く予定はない」

「だめよ」

麻子はしゃがんでコナンと目線を合わせ、周りに聞こえるように言った。

「あたし今日アメリカから着いたばかりだから、迷子になったら困るでしょ？ちゃんと道案内してよ」

だったらテメーは何で公園へ続く道の前で立ち止まった？そして、何故俺の手を引いて公園へ向かっている！言いたい事はいろいろあったが周囲の目もあり何も言えないまま、コナンははずると麻子に引きずられていくのだった。

米花公園に入るとだだっ広い芝生の広場に連れてこられた。周囲にポツポツとベンチが配置されているが、夏の日差しもあり利用している人はほとんど居ない。コナンもそれに習い木陰で荷物を降ろし、公園の入り口で購入したスポーツドリンクを一口飲む。麻子は？と思い、広場を見渡すと長い髪を結い上げて準備運動をしていた。準備運動が終わるとバク転、一呼吸置いてバク宙をする。

「確認・・・って、身体能力のことかよ・・・」

暑いのにご苦労なこった、と帽子を取って団扇代わりに扇ぎ始める。そうこうしている内に麻子の周りには子供たちが集まってきた。口々に「もう一回やって!」「もっと凄いの出来る?」等言われている。そして麻子が何かを子供たちに伝えたと、子供たちはサアツと脇に退いた。そして麻子は「いくよー」と声を掛けるとバク転を始めた。子供たちが1、2、3・・・と数える。ちょうど10回でバク転を止めるとそのまま前方に2・3歩駆け出しロンダートからバク転、後方二回宙返り一回捻り、通称ムーンサルトを披露した。

「おいおいおい・・・」

いくらなんでもやり過ぎだ。子供たちどころか大人まで拍手の嵐じゃねーか。どこの体操選手だよ。目立ちたがり屋はヤツの性分だな。キッドであろうが女になろうが大差ねえじゃねえか。

そう一頻り毒づいてコナンは芝生に寝転がった。吹き抜ける風が生ぬるい。このまま昼寝でもしてしまおうかと思っていると、どこからとも無く足音が近付いてきた。

「やっぱりコナン君だ」

「おお、ホントだ」

「コナン君もあのお姉さんの技を見ましたか?」

「いや、見たっつーか、目に入ってたって言うか」

コナンの現クラスメイト、歩美、元太、光彦の三人組だ。夏の暑さの中でも子供たちは元氣一杯である。

「じゃあ、見たんですね。凄いですよね。見たところ小学校高学年か中学生なのにあんな事が簡単に出来るなんて。僕も頑張れば少しは出来るようになるでしょうか」

何を期待しているのか光彦は顔を赤らめて興奮している。

「そんなの本人に直接言ってみればいいだろ」

コナンはゴロリと横へ転がり子供たちに背中を向けた。

「なんだよ、コナン。そんな言い方ねーじゃねーかよ」

「そうですよ。コナン君らしくないですよ」

「どうしたの？コナン君、もしかしてご機嫌斜め？」

ああ、そうだよ。ご機嫌斜めだよ。・・・だーっ、もう！アイツの所為で光彦に当たっちゃったじゃねーか！

「どうしたの、コナン？お友達？」

「ああ？」

お前がそれを言うか！とは思っていても口には出せない。コナンは先程の子供たちとのやり取りの自己嫌悪と麻子の出現で更に不機嫌さが増してきていた。それでもここで不機嫌を顕わにしては流石に大人気ない。コナンは気持ちを落ち着けるため大きく深呼吸をした。

「クラスの友達だよ。右から小島元太、円谷光彦、吉田歩美ちゃん。それからこの人は俺の従姉弟で江戸川麻子。夏休みでアメリカから遊びにきてるんだ」

「えー！コナン君の従姉弟さんだったの！！初めまして！吉田歩美です」

「初めまして。僕は円谷光彦です。さっきのは本当に凄かったです」
「俺、小島元太。ねーちゃん、ちっせえのにすげーな。小学生か？」

元太の問いに一瞬その場が沈黙する。そして言葉の意味を理解したコナンが腹を抱えて笑い出した。歩美、元太、光彦の三人は頭の上にクエスチョンマークを飛ばして首を傾げている。麻子はコナンを捕まえ、左腿に左足を掛け右脇から左肩を出し関節技を極めた。

「うわっ、ギ、ギブツ！悪かったって・・・」

「分かれば宜しい。いい、みんな。あたしは平均よりちょーっつと背が小さいけど現在17歳。日本に居れば高校2年生かな？でもアメリカでは大学に通ってるの」

「もしかして、飛び級ですか？」

「That's right. そのとおり！」

「頭いいんですね」

「ムダにな」

「ちよっと、コナン！」

そのときザーッと強い風が吹いた。コナンは帽子が飛ばされないように押さえる。麻子の長い髪が風に煽られ、歩美はスカートの裾を気にして押さえた。すると突然「あっ」という声が聞こえ、見ると小さな子供が上を向いて悲しそうな顔をしていた。

「風船かあ」

麻子が上を向いて呟く。つられて見上げれば細い枝の端の葉に止められるようにして引っかかっている赤い風船が見えた。あれでは木に登って取る事もできない。

「流石にジャンプして届く高さじゃないわね」

麻子は風船を取ろうと思っているようだ。アゴの下に手を当てて

真剣に考えている。その様子を伺っていると目が合ってしまった、さらに麻子の口元がニヤリとなってコナンはイヤな予感がした。麻子は風船の真下に移動し両手を組んでバレーボールのレシーブのような体勢を取る。

「コナン」

「まじかよ」

「早くしないとまた風が吹いて飛んでっちゃうでしょ」

「へいへい」

コナンは「歩美ちゃん、ちょっと持ってた」と帽子を預けると子供たちを少し下がらせた。

「降りるときはちゃんと受け止めてあげる」

「かえって危ねーよ。一人で着地できる」

コナンは助走をつけ麻子の組んだ両手の上に乗るとタイミング良く押し上げられた。そして目的の風船の紐を掴むと難なく着地する。子供たちの「すごーい」という声を聞きながら、コナンは持ち主へ風船を渡す。

「はい、これ。もう放さないようにね」

その日の夜、コナンがベッドに寝転がりながら本を読んでいると、

難しい顔をした麻子が部屋に入ってきた。ベッドの上に胡坐をかき携帯を置いてジッと睨みつけている。時折こちらを見ている視線にコナンは気付いていたがあえて無視をした。なぜ自分がこれ以上氣を使ってやる必要があるのか。用があれば何か言うだろうし、そもそもヤツは何でもできる。そんな事を考えながら本を読んでいたものだから内容が全然頭に入ってこない。更に麻子の視線が懇願するようなものに変化し、鬱陶しい事この上ない。

負けた・・・。

コナンは大きな溜息をつく、葉を挟んで本を閉じた。

「お前なあ、言いたい事は口で言えよ」

「・・・うゝ、明日の予定をキャンセルしようと思ったら、低い声が出なくて元の俺の声が出せないから電話が・・・」

と麻子は目一杯低い声をだしてみせ、「これがせいっぱい」とコナンの声マネで告げる。

「だったらメールしろよ」

「うん。それも考えたんだけど。ぜってー速攻で電話掛かって来ると思うんだよな」

「出なきゃいいだろ」

「いや、それはそれで後が怖いというか・・・」

麻子の煮え切らない様子にコナンはだんだんイライラしてきた。

「要するに何なんだよ」

「声が変わる蝶ネクタイを貸してください」

「最初っから素直にそう言えればいいんだよ」

「いや、その、なんつーか、一応無限の声を操る怪盗としての矜持が・・・」

「じゃあ、止めとくか？」

「カシテクダサイ」

コナンは立ち上がって、机の上から蝶ネクタイ型変声機を取ってくと麻子に手渡した。麻子は早速ダイヤルをくるくる回し、変化する音声に歓声をあげつつも素早く目的の声を探り出した。そしてメールを作成し、「送信！」と斜め45度上方へ向けてボタンを押して、二つ折りの携帯を畳んだときだった。

チャララ〜ラ〜チャララ〜チャ〜チャチャ〜♪

着信音が鳴る。

予想に違わぬ超速攻の返信だ。麻子は何故だか分からないが「わあー、きたっ」と言いながら携帯を取り落としている。

「落ち着けよ。いいから変声機使って電話に出ろ」

麻子は頷きつつ右手に変声機を持って通話ボタンを押した。

「もし・・・」

『カイトのバカー！』

コナンは携帯から漏れ出た声に「オンナか・・・」と一言呟き、再び本を開いた。麻子は電話をしながら部屋を出て行く。コナンは麻子の弱りきった様子に、今日一日分の溜飲が下がる思いだった。

04 怪盗の休日（後書き）

いつもお待たせしております。

今回もビミョーなテンションでお送りいたしましたしております。

ちよつとでも笑ってもらえると嬉しいです。

最後まで読んでくださり、ありがとうございます。

あさぎ 110426

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2542o/>

紅子様の呪い

2011年9月12日13時35分発行